

文化装置としてのスポーツ

— 「区分」社会からの脱却 —

横山 勝彦
望月 慎之

《ABSTRACT》

Sports as a culture system

— Leaving from a “separated society” —

Do you catch with the viewpoint of management of a sport. What is needed for embodiment? It is regarding a sport as public property and make it establish of society as cultural equipment. That is to say, it is that sport itself has social position and all sport players and the culture level which has many choices. However, there is ambivalence wanted lack of social recognition in a sport you can realize it by ridicule “one’s has a flesh brawny for the empty cranium”. Therefore, cognitive levels of all the human beings which engage in a sport intervenes the proposition is to improve.

First of all, a sport is private and free. The origin of a word of a sport is “carry away” by the theory are it means to ridding of the uneasiness of the heart by using the body. To move the body is understood man’s fundamental action principle. And the human revival by such action principle integrated object becomes realizable by high level integration among “brain-heart-body”. Regards discovery of this human action as be a game sport.

Sport in Japan was treated as an important political problem which relates with the basis of national formation, maintenance and development in modern society. The sophistication and popularization of a sport was promoted by close mixture of power, society, and military affairs through a company, and a school education organization. However, the changing of society which has remarkable competition principle and a market principle causes the collapse of an natural and obvious absolute “the system”. The environment surrounding a sport is not exception. And the present, athletic club and company sport are in a sluggish and decline phase.

The trends of new sport forms appear according to such environmental changes. They are a policy of Ministry of Education, Culture, Sport, Science, and Technology, the J-league 100-year design, a sport NPO corporations, and university consortium Kyoto. And I point out the prospects in five points on a basis of such a trend.

- New function of a sport “Hub”-social capital construction.
- To reform community’s consciousness about sports.
- To reform company’s schema to support sports culture and to reconfirm a social role of sports.
- A balance of cultural to persuade sports as commodity value and cultural value of sports.
- Promotion system of synthetic sports policies which surpass a bureaucratic in administration.

That is to say, “the governance” which grasps the sports organism as an action of management is necessary. Although the viewpoint of management supplies a impact methodology to sports promotion, sports are embodiment of “all-round education”. So it is re-construct self sports order which have impulse to exercise as a starting point.

Keywords: The social recognition about sports skills. The high level integra-

tion among brains, minds and bodies. The governance of sports party. Education for the whole man. Logical sequence of sports.

〈は じ め に〉

1. 再考, スポーツの定義
2. 日本のスポーツ形態の特徴と伝統的な機能
3. スポーツを取り巻く環境
4. 課題と展望

〈お わ り に〉

文 献

キーワード：スポーツ技術の社会的承認, 脳・心・身体の高水準の統合体, スポーツ団体のガバナンス, 全人教育, スポーツ条理

〈は じ め に〉

スポーツについての研究は、一般的にはスポーツ科学という括りで呼ばれることが多いのですが、スポーツは何と言っても勝ち負けということで、勝つこと、つまりパフォーマンスに直結しやすい医学、生理学、栄養学などの自然科学系からのアプローチが主流でありました。それはそれで大事なことでありまして、アテネでのオリンピックではその効果があらわれ、メダルが37個とのことで関係者は大喜びでありました。

しかし、よく考えてみますと、卓越したスポーツ技術も社会的な承認を得られないといわゆる宝の持ち腐れということとなり、大変勿体ないこととなります。また、一流選手の多くには、多数の専任スタッフのサポート体制があるとのことで、乱暴に言いますと、至れり尽せり状態で、言わば選手は筋肉マシンと言うかサイボーグ的に製造され、個としての人間的な成長などについては不安定な状況にあると指摘されます。主体性や自律性はあるのかという問題です。

塾の先生の、よく耳にする科白があります。子供たちが課題で忙しく、宿題の答え合わせをお母さんやっというてと言うが、それはダメです、賢くなるのは

お母さんです、と。スポーツ人もよく似た状況ではないでしょうか。教育機関による学力への配慮、技術のコーチへの依存、競技に付随する環境のマネージャーによる整備などといった過剰とも言えるサポート体制です。自分はどこにあるのかということです。これが、スポーツが軽んじられる遠因ともなっているとされます。

スポーツが正当な社会的認知を得るためには、スポーツを文化として認識し、スポーツが我々の社会にとっての重要な公共財であるという共通理解を広げていくことがポイントとなります。タイトルとした「文化装置としてのスポーツ」という認識です。そして、そのためには、何よりもスポーツに関わる一人一人の社会性を高めることが要件となります。

これには2つあります。1つは、プロかアマかに関わらず、世間的に求心力を持つ選手達の教養の高まりです。教養と言うと、大学では「般教」と学生は呼び、「専門」に比べて軽い扱いを受けがちですが、教養は実は物事のベースとなるものです。教養とは、悪事に誘惑されそうになった時や怠惰など、何かネガティブになった時に、「みっともないからそれはやめる」、「それは自分にとって恥ずかしいからやめる」という感覚だとする、ある研究者¹⁾の考えがあります。つまり、自分の中にきちんとした規矩があり、それに沿った節度を持つことが教養の意味ということです。そして、こうした教養を身に付けるためには、多くの選択肢をできる限り多く体験し、さらに時間をかけて練ることにあるとのことです。つまり、自己形成ですね。果たして、今、そうした環境が日本のスポーツにあるか。非常に疑問です。

もう1つは、スポーツの「仕組み」作りに関わる人々の意識です。監督やコーチなどの指導者、プロでありますと経営者やスタッフ、教育機関でありますと教職員といった人々のスポーツの位置づけに対する認識です。その競技種目は好きだが、その団体となりますと何か違和感がある。本当は、スポーツは素晴らしいのに、その本質とは離れた、バイアスがかかった組織や運営となっている側面もあるということです。ヒエラルキーが形成され、異なった意見や論理などを受容しない。ドグマに陥り、それが再生産される。多くの大学という場

においてもスポーツの位置づけは不安定ですし、スポーツ系の学生に対してもある種の偏見があることも事実です。世間も、一般的には、スポーツを「ストック」とは見ないで、余分なもの、余力がある時に対象とするもの、つまりまだ「コスト」という見方が強いと思われれます。

これらのことを社会の縮図と言ってしまうかもしれませんが、スポーツに関わる者全てが声をあげていかないと、スポーツの問題はいつまでたっても他の社会の事象とパラレルな問題として扱われれない。サブタイトルに示したように、スポーツ界が「区分」社会ではスポーツ、ひいては日本社会の未来は暗いということでもあります。

これが私の問題意識でありまして、このスポーツマネジメントスクールも広瀬先生のスポーツに対する同様の思いがその原点となっているように拝察します。そのために、皆さんはスポーツを取り巻く法律やマーケティングなどについて認知的レベルを高めていかれるというわけです。そして、私からは、マネジメントを「取り扱い」と捉え、そうしたナレッジを獲得された上で、今後スポーツをどのように扱っていくかについて、皆さんに考えていただく一助となれば幸いということでお話させていただきます。

1. 再考, スポーツの定義

皆さん、改めてスポーツとは何ですかと、聞かれたらどう答えますか。体育と違うの、遊びでしょう、いや教育だよ。フェイントとかを使ったり、弱点をついたりして、いつも自分が一番でなければ気がすまない人がやっていることでしょう。こんな風に言う人もいるように、スポーツが日本になかったものですから、いろいろな誤解や思い入れ、あるいは立場で、いろいろな分野の人があれこれ本当に多くの定義をしています。身体教育、身体運動、身体活動、運動競技、運動文化、トロプスといったところがその代表例であります。平たく定義すると、娯楽、楽しみ、気ばらし、遊びとなりましょうか。からかい、たわむれ、あざけり、冗談といった用語は、少し自虐的と言いますか、このようなことを思っている人もいるだろうということでの定義です。だから、人

によってはスポーツの捉え方が違い、それが日本にスポーツが文化としてなかなか定着しない一因ともなっているように思います。

研究者でも意見が分かれるところとなっていますが、その中にあるトロプスというのは、そういう未統一なスポーツ界の端的な例かもしれません。SPORTを反対に呼び、TROPS（トロプス）ということです。表面的には美しいことを言っているが、スポーツは要は勝ち負けという弱肉強食的なもので、それを超えたものになりたいというある研究グループ²⁾の用語です。簡単に言えば勝敗をつけないスポーツをしようという運動です。スポーツが文化という個人的な関心からすれば、一理あるとも思うのですが、やはり人間は本能的に争うもの、優劣をつけたがるものということで、最近はあまりこの運動を私が知らないだけかもしれませんが聞きません。

それはともかく、語源的に見て、それらの中で一般的なのは、デポルターレというラテン語から転用された³⁾という説です。デポルターレからデスポルト、デスポート、そしてスポーツということです。今、我々がなじんでいる英語では Carry away ということ、運び去る、とり除く、という意味です。何をとり除くのかと言えば、不安です。つまり、心の不安を身体を動かしてどこかへ運び去る、心を開放する。心の不安は、昔は今と違ってもっと過酷で深刻ですよ。労働の肉体的な苦痛も我々の想像を越えていたはず。そういう肉体のしんどさがあったにも関わらず、身体を使って今風に言うストレスの発散をしたというのがスポーツの語源とされています。それで、仕事から離れる、真面目なことから切り離す、遊びといったところに帰着したわけです。

だから、日本で遊びと言うと、我々が一番不得意な分野であり、軽く見なされがちで、これが日本におけるスポーツの社会的地位を低くしている一因ともなっているのですが、実は遊びは人間をトータルで考える際には、基本的な人権の1つともなる重要な概念なんですね。従って、スポーツとは何かと定義するならば、私は、人間の基本的で、本能的な行動原理、ちょっと固く言うと、遊びを本質的な属性とした身体運動文化と定義できるのではと思います。

もともとスポーツは奇麗事ではなく、人間が持つ残酷性や暴力性をルールと

いう困いを持ち、合法化したものとも言えるわけです。で、これを一歩進めて我々一人一人の存在ということイメージして考えると、脳と心と身体の高水準な統合体がスポーツとなるのであります。

人間には脳があり、身体があり、どこにあるのかよく分からないが心と呼ばれるものもあります。我々を構成する要素はいろいろあるとしても、我々はこれら3つから成り立っていますよね。スポーツが何故素晴らしいかと言うと、技術としてこれら3つが一瞬のうちにリンクし発揮されるところです。だからみんなが賞賛するし、あこがれるし、本能的にすごいと思うわけです。つまり、人間は全体的で有機的なものということへの無意識的な確認ということです。

で、問題は、西洋も東洋も、もともとは原初的にはこのような人間の捉え方だったのですが、人間が社会を構成しだすと色々なことを考えるようになります。皆さんもご存知のように、科学と呼ばれるものは、古代ギリシャが原点ということです。有名なプラトンさんは、思考と身体を分離し、身体を客観化し、それを可能とする頭脳存在を認めたとされています。物事を観念的、分析的に見ようということです。もう一人の有名な人、アリストテレスさんは精神の作用と物質としての身体は未分離のもので、トータルでものを考えようという発想とのことでした。で、デカルトさんは身体と心は別で二元論という立場をとり、今、世界は近代合理主義（功利的合理主義）が主流です。言葉を変えると、要素還元主義です。人間は部分の集合体というわけです。

だから、皮肉なことに、語源的に見たように、今で言う、管理社会からの脱出、合理、機械的システムからの超克、つまり、「人間復興」が近代スポーツの原点だったのにパラドックスになっているということです。3つの円に例えますと、脳という円があり、これは知性、知識ということです。これが突出してしまう。「知」の偏重です。行き過ぎると昔の中国の「科挙」制度の弊害のようになります。次に心と呼ばれる円があり、これは宗教ということです。精神ばかりが強調され、非科学的で、行き過ぎると世間を騒がすカルト集団化するということです。スポーツで言えば極端な根性主義というところでしょうか。3つ目は、身体という円です。これへの偏重は筋肉番付というテレビ番組にあ

るように、全体筋肉化、乱暴に言う、スポーツ人は頭も筋肉かといったあざけりを生みます。本当は頭が悪ければスポーツはできません。

思いますに、考えすぎかもしれませんが、人間は先程から言っていますように1つですのに、今、これら3つが独立して、重なってこない状態にあるのではないか。もし重なっていたとしても、3つの円がバランスよく重ならないで、どこか1つが突出してしまっている状態と思います。そして、このことが現代社会の歪みや不安定さ、何か居心地の悪さを生んでいるように思います。スポーツは先程言いましたように、脳や心の不安を身体を使って全体的に開放しようというものの、身体ばかりが突出したいびつな状態にあるということです。脳と心は、知性と感情と意欲といった面で連関し、心と身体は感覚で結ばれ、身体と脳は運動のコントロールで繋がり⁴⁾、これら3つの円がそれぞれに大きく同じ大きさをバランスよく重なり、その3つが重なり合ったところがスポーツという人間行動の発現だということです。

2. 日本のスポーツ形態の特徴と伝統的な機能

そもそも、こうしたスポーツを国や社会組織、団体などがある方針をもってシステマティックに展開しよう、スポーツ政策ですね、これが成立するのは、19世紀の近代社会という国民国家が成立してからということになります。それまでも、庶民レベルでは何らかの身体運動が、それこそ遊びとしてなされていたはずだったし、健康とか運動は日々の労働とか生活の習慣で解決できるものだったわけです。ただ、古代ギリシャのポリスとして有名なアテネや、スパルタ式で有名なスパルタでのスポーツも、軍事やそれに繋がるある一部の特権階級での教育であったと言われています。今のオリンピックに繋がる古代オリンピックでの競技会は、祭典競技、つまり埋葬競技会ということで、ポリス間の共通の神々に競技を奉納する⁵⁾というのがその起こりだったということで、女性が排除されるなどスポーツが広く国民の生活と深い関連を持ち、そのための基本的な方針や長期的なビジョンを持って展開されたものではなかったということです。

ご存知のように、18世紀に産業革命がイギリスで起こり、19世紀始めにヨーロッパ各国に普及しました。これが、社会構造の転換をもたらしたということですが、スポーツにとっても大きな転機となったわけです。産業革命は機械生産ということで、そこから労働力というものはそれまでの生活とは離れたものとなり、産業化生活の中に人は組み込まれていくわけです。分かりやすく言えば人間の機械化ということです。これにより、これまでの共同体ではなく、国家というものが生まれ、ナショナリズムが台頭してきます。ナショナリズムは、対外的な承認を要請しますので、他の国を侵略して、自分の国は守る、国防ということが重要な課題となります。それには、一人一人の国民の身体の成熟や発達がポイントとなり、それを国が主導し、身体的な武装をすることが必要となってくるといえることです。いつの時代にもある軍事ですね。ただ、古代のそれと違って、規模は大きくなり、そのため産業化生活には、健康や楽しみや他者との連帯といった要素の要求は個人からも国からも強くなるわけです。

我々が今日行っている器械体操はドイツのヤーンが考案したもので、愛国運動との結びつきが大変強いものでした。狙いは、近代国民国家を支える国民を育成しようということで、後に悪名高いヒトラーも絶賛しましたし、社会主義体制をとった東ドイツでも高い評価ということでした。ですから、日本ではあまり表面的に、身体と運動をめぐる問題は取り沙汰されませんが、実は、これらは国家の形成と維持・発展に関わる重要な政治問題なんですね。善し悪しは別にして、ブッシュ大統領がイラクとの問題の時に、アメリカ国民よ、1日30分は運動しろ、強いアメリカは体力と健康からと呼びかけたという新聞記事をご記憶の方もおられるでしょう。

そのため、スポーツ政策としては大きく2つとられている⁶⁾わけです。1つは公教育における「体育」の制度化です。つまりスポーツの大衆化です。これにより、身体を成熟させ、もって労働力を再生産し兵力の増強に結びつけるということです。日本もこれを明治維新後に導入しました。文明開化、富国強兵ということで、諸外国に追いつかなければという時に、いろいろな西洋の目新しいもの以前に、国民の体格・体力の脆弱さが問題となりました。これをどう

にかしなればいけない、日本ではそれまでは武道ということですが、一体これを誰がやっていたのでしょうか。士農工商の士のみの一部ですよ。身体を扱う技術を輸入しなければならない。ではどこからということになり、それはアメリカだ、新島だということになりました。幕末、国禁を破り函館から渡米し、世界で始めて正課として体育を導入したアーモスト大学に留学した新島を窓口にして体育教育を導入し、体操伝習所を創設した。それ以降、スポーツを教育機関で受け入れたことにより、一面では、日本でのスポーツが他国に例を見ないほど普及することとなりました。しかしながら、他面では、皮肉にも教育との強い結びつきが、今日のスポーツが抱える問題の原因の1つともなっているんですね。

もう1つは、競技スポーツの奨励と援助です。つまり、スポーツの高度化です。これは社会的な威信を高める機能と人々を連帯させる機能を持っています。今も同じで、日本人はよく4年に1度のオリンピックの時にナショナリストになる、といったことで、ナショナリズムに統合させやすいということです。さらに、それは、一面では公権力の正当化、つまり、権力の維持を可能としますし、庶民の不満を拡散することもできるということです。社会的安全弁といった役割です。日本では、これを企業という枠組みに託しました。企業にとっても競技スポーツは、労務管理や福利厚生、そして広告宣伝の有力なツールとなったわけです。強いチームを持つことは、社員の帰属意識を高め、一体感を醸成し、ブランドイメージを向上・定着できるということです。以上のことは、今後のスポーツを取り扱う時に本来的な意義である、私的で自由なものということと権力との関係に注意を払う必要があるということを示唆しています。

このような背景なり経緯により日本ではスポーツを教育機関を受け皿に導入し、発展させ、企業とともに高度化させ、今のスポーツがあるわけですが、こうしたスキームが今、社会の変化とともに崩れてきているということです。

まず、教育機関では、スポーツ人口や競技種目を安定的に維持させてきた、学校の部活動が低迷化してきています。チームも組めない、2～3校合同でチー

ムを組む、もし優勝したら全国大会はどうするの、といったところです。簡単に言うと、部活にはあまり力を入れなくてよいということで、部活に熱心な先生が自分で好きにやっていること、教師の本分は正課の教科にあるということで、教師間の理解が得られない。種目によっては顧問のなり手がなく、あってもスポーツ経験がなく生徒から信頼が得られないといった具合で、公立中学校を見ても運動系は5つ6つぐらいしかクラブがないようなところもあるということです。後でふれる総合型地域スポーツクラブとの関連かもしれませんが、まだ日本では、教育機関がいろいろな種目に親しむ機会となっているということを見ると、競技人口など先行きに不安を感じる状況とも言えます。

もう1つは少子・高齢化です。子供は少なくなり年寄りが増えてくる。合計特殊出生率では置換水準の2.1に及ばない1.9レベルで、近い将来はほぼ3人に1人が65歳以上という社会がくるということです。発育・発達面での身体運動は、やはり健康面にプラスということですから、正課の学校体育だけでは不足で、毎日何らかのスポーツに親しむ機会提供は重要となります。年をとってから、一輪車に乗ることや運転免許を取ることが難しいように、若い頃からの技術習得がなければ、さて健康のためにスポーツをやろうとしても、ストレッチの方法からということになってしまいます。スポーツができる体を作る体操からというわけです。

高齢者の望みはPKOで死ぬことだそうです。PKOとは、死ぬまでは「ピンピン」していて「コロリ」と「オシマイ」、ということだそうです。スポーツに親しむことは、身の回りのことを自分で行える筋肉があり、それで好きなところへ行けるといった、自立した生活、仲間と同じネタでコミュニケーションがとれるというように、QOLに通ずるものとして捉えられます。男性が76歳、女性が82歳ぐらいまで生きるというか生きなければいけない。しかも経済状況が悪い。生身の身体を楽しく鍛えるしかないということです。この高齢化の問題はどこの先進国でも深刻なのですが、このような個人が増えれば、まず医療費を大幅に削減できるということに繋がります。実際、カナダやオーストラリアなどは国家政策で国民スポーツに取り組み、スポーツ実施率を上げ、現

実的な効果を生んで、医療費の余剰分を他の社会的インフラへまわすという例が見受けられます。だから、運動やスポーツの入り口となる教育機関におけるスポーツをもう一度考える必要があるということです。

で、もう1つは、日本のスポーツ形態の特徴である企業を見ても、皆さん既にご承知のとおり、大変な数の企業チームが撤退しているわけです。2000年までのデータでは177チーム⁷⁾となっていますが、最近では、270チームを超えているということです。問題は、手放したとしても、会社に何故やめたのかという抗議の電話はまずかかってこないし、皮肉にも手放したとたん株価が上がるという現実もあるということです。では、一体何故こういったことになったのか。

私は今50歳なんですが、子供の時にソビエト連邦の崩壊、ドイツ・ベルリンの壁の消滅、国鉄の民営化など予想もしませんでした。つまり、あることを疑わない、自然で、自明であった「制度」という存在が絶対的なものでなくなってきているということです。教育学者⁸⁾が指摘するように、黙っていても正しい使命と正当性を与えられていた「学校」もそうだし、全人格的に従属していれば、生活の安定を保障されてきた「職場」も、個人が全面的に拠り所にすることができた「家族」などといったものもそうではなくなってきているということです。スポーツを中学校の部活動で始め、先輩やコーチなどの指導というか理不尽さにも耐え、強くなり、高校・大学とスポーツ推薦で入学し、そして企業スポーツで活躍したりプロになったりする。引退してもまあ死ぬまで食べていけたという時代ではないということですよね。

それに代わるキーワードは「個人」化ということです。今までは、個人の存在に先だったものがあったし、そこに丸ごと帰属していれば自動的に生き方を指示してもらえた、いろいろな「制度」が当たり前ではなくなり、現在では個人が制度に先立って存在しているという指摘です。もっと言えば制度につき止まらない個人が多くなってきているということです。社会の変容もこの「制度」と「個人」化という視点から理解することができます。で、先に言うと、後でふれるこれへのスポーツからの対応策はありますが、全般的に見て、スポーツ団体や組織が少しこれらの動きに周回遅れになっている点がここであげられ

るということです。だから、これらを知ることは、今後のスポーツを考える際に不可欠な要素となるということでもあります。

まず、行政の分野ですが、ここでは、皆さんがよく承知されている、中央集権から地方自治・分権へという流れがあります。これは、用語としては「行政」だが、内容は「経営」という理解をしていこうということでもありますし、さらには、統制や体制といったものから戦略へと発想を変えようということです。背景には、行政学の研究者⁹⁾によると、市民という表現よりも生活者、つまりよりよく生活したいという意識に目覚めた生活者市民、英語では「ライフ・イノベーター」となっていますが、それらの出現があるということです。従来のように、個人は単一のステークホルダーではなく、住民であるし納税者であるし投票者であるし、企業に対しても勤労者であると同時に消費者でもある、というように、社会におけるステークホルダーの重複現象が出てきたということです。だから、地域の主体は、第一セクターの行政、第二セクターの企業、第三セクターの公益法人から、NPO、コミュニティービジネスなどの市民セクターへと多様化を見せているとのことでもあります。

次に企業ですが、企業もこれまでの、不特定多数市場に向けた標準化した大量生産・大量販売方式といった市場的な考え方では手詰まりで、企業も地域の一員という「企業市民」という立場にたって、消費者との意思疎通を図らないとやっていけないということだそうです。今はやりのCSRに代表される社会貢献論¹⁰⁾ということですが、これは伝統的な経済学理論に依拠したフリードマンやハイエクなどの、経済的成果を達成することが企業の社会的責任、という古典理論や、ドラッカーなどのステークホルダー理論（株主と社会一般、一般大衆を除く、従業員や消費者などの会社の意志決定によって直接的な影響を受ける人々への社会的責任）やフィランソロピー活動（慈善活動）などの社会的要請理論と少し違って、企業は社会的活動者として正義と倫理つまり、道徳的目的を持たなければいけない、ということでもあります。

3つ目は、情報インフラの変化です。インターネットの登場ですね。情報には、かつてのように送り手対受け手という二分法的な図式はもうなくて、1人

1人の個人が情報ネットワークの継ぎ目や節となるという指摘です。だから、与える・与えられる、教える・教えられる、売る・買うといった、今までのような関係性が変わり、例えば、大学の場合ならば、学生は教員よりも若い分、情報収集能力、想像力があるわけですから、これまでのように知識を与えるという方式では務まらないということです。古いデータなどを発表すると学生の方が最近の数字をおさえていることもあり、冷や汗をかいたという話がよく紹介されている¹¹⁾ということです。ただ、理解力や構成力といった経験がものをいう面もあるので、学生自身が集めた知識をその学生自身に関係づけられるよう、方向性などをサポートするといった風にしていくという動向にあるということでもあります。スポーツもこのようにリテラシー教育がポイントになるということですね。

となれば、4つ目は、大学もこれまでの伝統的な個別科学という狭い専門だけにとじこもっているのは、社会の問題の解決はできないということになります。中立的に客観的に分析をする伝統的な方法から、現実の具体的な特定の事例に踏み込んで解決方法を見出していくという知の方法が求められている¹²⁾ということです。問題に対して当事者意識を持ち、結果に責任を持つ実践学ということです。国立大学独立法人化、大学のランク付け、文科省による直接助成の方向など、そうでもしなければ大学の存続が危ぶまれる事情も存在しているわけですが、競争と市場の原理が否応なく入ってきて、先ほどふれたように、制度が崩壊し、大学ということで当然与えられてきたアイデンティティーを、今は、生き残りをかけて獲得していかなければいけない時代だということです。

3. スポーツを取り巻く環境の変化

それでは、これらの社会の変容に対して、いわゆるスポーツ側はどう対応しているかということが問題となるわけです。悲しいかな、スポーツは逆にこのような社会の変容を生み出すようなリーダーシップがとれていないのが現実です。その中で、何とか対処していこうという動きとして4つあげました。国家

の政策が1つ、ご存知のサッカーの百年をかけた壮大な実験が1つ、市民セクター式のNPOが1つ、で、せっかく京都ですのでコンソーシアムでの取り組みが1つの計4つです。

1つめは、文部科学省施策として現在展開されている「スポーツ振興基本計画」です。この大元は今から40年以上も前に作られたスポーツ振興法です。目的や特徴は表-1にある通りですが、全般的に「～に努めるべき」、「～にすべき」といったような努力目標が多く、強制的規定がないため、具体的な計画の実施までに40年かかったということです。そもそも、日本にはスポーツ省がないという事実から考えても分かるように、他の分野に比べて法規の整備が遅れているわけです。スポーツは法律になじまないということかもしれませんが、プロ野球の問題のように、では一体、スポーツの法的保護や法的地位はどうなるのといったことにも繋がっています。法規上も体育やスポーツといったタームの定義も明確ではありません。

まあ、それはともかく、これはスポーツを学校から切り離し、地域の中に組み込んでいくということで、スポーツクラブを各市町村の中学校区に少なくとも1つ作ろうということです。今、平成の大合併ということで、市町村がいくつ減るか分かりませんが、合併前には3,200ぐらいの市町村があり12,000ぐらいの中学校があるということですから、すごい数のスポーツクラブがうまくいくとできるということです。そして、その中からオリンピック選手を輩出し、96年には1.7%しかなかったメダル率を3.5%にし、国民みんなに納得してもらって税金を投入しよう、さっき言った健康面からみんなスポーツをしようといったことが方針です。大きなポイントは、受益者負担の原則と自主財源化の実現ということです。ピアノや踊りとかは高い月謝をとるが、スポーツはただでできるという理解や、また、スポーツと言えば寄付などがつきものといった図式の打破ということで、狙いは評価できると思います。が、問題はやはり山積しております。学校から離して地域へということだし、いろいろな種目をしよう、いろいろなレベルの人が集まるとなれば、中体連、高体連の人たちとの連携、クラブマネージャーの問題、指導者の問題、学校の部活の問題など解決してい

表－１ 文部科学省施策「スポーツ振興基本計画」

1961年「スポーツ振興法」	
背景	第二次世界大戦後のスポーツ普及の高まり、国民生活の水準向上、余暇時間の増大、健康・体力への関心の高まり、 1964年東京オリンピック開催
目的	スポーツの振興に関する施策の基本を明らかにし、もって国民の心身の健全な発達と明るく豊かな国民生活の形成に寄与する（第一条）
特徴	非強制性、教育的目的性、非営利性 ●精神や訓示規定の法文（強制及び罰則規定なし）
性格	社会教育法の特別法としての体系 ●スポーツを法律用語として定義する困難さ ○社会教育法＝体育 ○スポーツ振興法＝スポーツ＝運動競技、身体運動、野外活動
議論	スポーツに関する国の行政機構の抜本的改正 ●スポーツ行政の一元化、体育・スポーツ領域における法規の欠缺
2000年「保健体育審議会」答申	
	●「スポーツ振興基本計画の在り方について」（2000年8月）
2001年「スポーツ振興基本計画」発表	
期間	2001年～2010年の10年間、5年目に中間見直し
財源	税金、スポーツ振興基金、スポーツ振興投票
方針	1) 地域におけるスポーツ環境の整備 2) 国際競技力の向上 3) 生涯スポーツ・競技スポーツ・学校体育との連携推進
達成目標	1) 50%のスポーツ実施率（成人、週1回） 2) 3.5%のオリンピックにおけるメダル獲得率 3) 学校、地域社会、スポーツ団体への働きかけ
主な施策	1) 総合型地域スポーツクラブの全国展開 2) 一貫指導システムの構築とナショナルトレーニングセンターの整備 3) 学校体育の充実・運動部活動の改善・地域指導者の協力の拡大

（出典：「戦後日本のスポーツ政策 ― その構造と展開」関春南，他より著者作成）

かなければならない現実が多くあります。モデルケースとして助成を受けている時は成功しましたが、その後は苦しいというところが多い現実や、既存の組織体と整合性をとるのが難しいということもあります。

2つ目のJリーグ百年構想と、3つ目のNPOについては、皆さんもう既によく知っておられることと思いますので、ほんの簡単にふれさせていただきます

す。

ご存知かもしれませんが、大学発NPOとして先陣を切ったワセダクラブも、他の競技種目からの参加は見込めず、ラグビー部主体でありますし、名称もワセダか、杉並区にあるから杉並クラブかで悩んだそうです。ワセダクラブにすると杉並区の明治、慶応出身者は確実に入会しない。地域名を生かすと有名性に欠ける、といった悩ましい問題があったということです。ワセダというブランドイメージで企業から、今8社ぐらいの企業連携をとっているようですが、企業からの協賛は得られるが、大学内からも外からも公益性と言うことで一部に反発がある¹³⁾とのこと。これらの点を見ても、いわゆる生みの苦しみ状態にあるわけです。

ただ、玉虫色だのといった一部のジャーナリスティックな批判は簡単なのですが、批判だけではいけないので、私たちが周回遅れにあるスポーツを何とかしなければいけないということで、コンソーシアム京都、これは、京都にある国・公・私立の51大学と京都市と経済団体で構成されている産・官・学連携を目指す財団法人ですが、ここにスポーツ文化研究会を立ち上げ、各界の第一人者のスポーツに対する考え方を聞き、方向性などを確認するためシンポを開催し、京都唯一のプロスポーツクラブのパープルサンガと協同でイベントをしたり、多くの学生達の声も聞こうということで互換授業をしたりしてきました。

特にシンポジウムでは、皆さんご存知の有名な方が来てくれまして、多くの意見や考え方を頂戴しました¹⁴⁾。その中で、印象深く、今後のスポーツを考える際に参考となる発言を、私なりに理解した上でかいつまんで2、3紹介します。Jの川淵さんからは、Jリーグの構想は地域がキーワードだが、何も難しいことを言っているのではなく、その意味は、お父さんの改革にある。お父さんが付き合いだの仕事だの大義名分をつけて飲んだり遊んだりしないで地域にというか家に仕事後は帰り、子供たちとスポーツをする環境がその元となる、とのことでした。私にとっても耳の痛い話でした。

今はフリーになられた吉本興業の木村さんからは、多くのタレントを育ててこられた経験から、そのコツはホメ殺しにならない程度に「ほめる」ことにあ

る、そして吉本はたいへん低いペイでタレントを使うあこぎな商売をしているように芸人は言っているが、能力のある人、人気のある人にはたくさん出す、つまり本当のプロになることが大事だ、ということでした。

作家の玉木さんからは、日本の未成熟なスポーツ事情を垣間見るエピソードを多く紹介してもらいました。体育館建設には反対だが、コンサートホールはOKというか反対はしにくい。何故ならば、文化が分からないと思われたらカッコ悪いので。また、新築の体育館のお披露目では新体操の棍棒の演技は床に傷がつくということで禁止される。このように、スポーツが文化として捉えられていない住民認識が依然として根深い。アメリカではスポーツ施設建設のために消費税率が一時期上がることもあるが、住民の反対意見は全くでない。要は説明責任をしっかりと果たしているからだ、といった指摘でした。

女子プロバスケットの萩原さんからは、アメリカでは、例えば乳がん撲滅キャンペーンへの親睦スポーツ大会への参加の義務など、社会的貢献へのリンクが選手契約の時にあるという興味深い話もありました。

で、こうした研究成果をふまえ、コンソーシアム京都で今年の夏から実践事業として京都スポーツクラブという名称をもって、大学運動部主導によるスポーツ教室やらクリニックやら講習会などを実施しようという運びとなりました。狙いはおよそ3つあります。

1つは、大学間の連携です。自チームの勝ち負けがどうしても優先するので、その持っているノウハウとか資源を外に向かって生かしてきていない。まあ、平たく言えば指導者同士あまり仲がよいとは言えないので、いわゆる恩讐を越えて仲良く同じテーブルについてもらおうということです。1つは、学生の成長環境の構築です。学生に直接子供たちを指導させることにより、教えることは学ぶことという鉄則を体験的に身につけてもらおうということです。1つは、コンソーシアム京都という財団法人の事業にこうしたクラブを位置づけることによるスポーツの社会的な位置づけの向上です。また、他の事業との対等な関係性の構築です。

この6月18日の土曜日の昼に、その発端として、同志社のサッカー、立命の

アメフト、龍大のラグビー、京産のバスケの部を直接見ている人たちをお招きして、我がクラブの地域貢献への取り組み、考えといったテーマでシンポジウムを予定しますので、この場を借りて、ご興味ある方は参加してもらえればと思いますアナウンスさせていただきます。

ということで、以上スポーツを取り巻く社会の変容に対するスポーツ側の対策というか取り組みについて整理したわけです。で、最後の論点として、さらに今後、スポーツを文化装置として社会に定着させるには、ということで課題と展望に入ります。

4. 課題と展望

このようなスポーツを取り巻く変容を、やっとスポーツが持つ本来の多面的な機能を生かす場がきたというように捉えるべきと私は考えております。

表-2 に示しましたが、1つ目は、社会の変化やそれへの対応のキーワードは「地域」です。そして、それへの参画意識や貢献やそこの交流ということです。スポーツも、プロ・アマ問わず、大学でやろうが、中・高や企業クラブでやろうが、地域に場があるという当たり前の事実をもう一度思い出すことです。それには、京都でいう「一見さん」ではなく「顔なじみ」がポイントとなります。地域と顔なじみになることにより、応援もされるし自分も頑張れるし、経済的な支援もついてくるというわけです。だから、ポイントは、これまでのように、従属的、受動的に存在するのではなく、積極的に、能動的に地域の行政や企業との連携をとり、スポーツの持つ社会活性化機能をもっと訴え、コミュニティとの様々な繋がりをネットワーク化する「ハブ」となり、地域力を社会資本としていく動き、これはソーシャルキャピタルと呼ばれるものですが、これを主導する姿勢を持つことです。

次の住民に対する意識改革から、行政におけるスポーツ推進体制は、先程紹介した京都スポーツ文化研究会として京都市に提言した内容¹⁵⁾をまとめたものです。住民に対する要望のポイントは、成熟した市民、つまり、「ライフ・イノベーター」ということを冒頭でお話しましたが、まだまだスポーツに対して

表－２ 課題と展望

◎スポーツの新しい機能 ソーシャル・キャピタル構築の「ハブ」
<ul style="list-style-type: none"> ●「地域」は時代のキーワード→「顔なじみ」文化 ●産・官・学連携ネットワークの結節点としてのスポーツ ●社会貢献・地域交流の促進
◎地域住民のスポーツに対する意識改革
<ul style="list-style-type: none"> ●すべてのスポーツ環境整備は、スポーツが有する文化的・社会的価値を地域住民の認識レベルで高めることが大前提 ●スポーツが持つ多面的機能の有用性の享受は、人間が本来持ち合わせている生理的欲求の一つの充足 ●スポーツの環境整備への要望は、より豊かで文化的な生活環境を獲得する権利の行使
◎企業におけるスポーツ文化支援に対するスキームの変革と社会的役割の再確認
<ul style="list-style-type: none"> ●脱企業型スポーツクラブと独立採算を目標とする地域クラブの動向のもと、利潤を追求する組織体としてのスポーツに対する厳格な認識 ●企業市民としての、スポーツに対する、地域住民の生活文化向上に結びつく重要な文化とする位置づけと積極的な参画姿勢 ●所有から支援へ
◎メディアにおけるスポーツの商品価値としての追及と文化的価値のバランス
<ul style="list-style-type: none"> ●スポーツはデパートのおもちゃ売場 ●エンターテインメント性と文化性 ●社会的役割と責任に基づいた価値バランスの判断
◎行政における縦割りセクショナリズムを越えた総合的・横断的スポーツ政策の推進体制
<ul style="list-style-type: none"> ●直接的サービス提供中心から総合的コーディネート機能の重視へ ●コミュニティづくりは供給サイドの「専制」型から重要サイドの「民主」型へ
◎スポーツ組織体のガバナンス
<ul style="list-style-type: none"> ●Science of Sport Management から Management Science in Sports へ ●スポーツ組織体を経営体の行動と捉え、組織体の仕組み、課題環境、具体的行動、意志決定のメカニズムといった問題意識を研究対象とする方向 ●「管理」と「経営」、「体育」と「スポーツ」、それぞれの両者間における概念の共通理解の安定が課題 ●スポーツは社会における公共文化財 ●プロスポーツ組織、体育会、スポーツクラブなどはヒューマン・サービス組織 ●エンパワーメントを高めるネットワーク型組織へ ●「理解しがたい他者」から「分かりあえる仲間」へ ●あるところから目的地まで顧客を馬車で運ぶ ●「以心伝心」、「阿吽の呼吸」とアカウンタビリティー ●キャリアアカウンセリングの導入 ●「プロ養成」型と「文武両道」型 ●「トラック」の単線化とセカンドキャリア ●インフォメーションとインテリジェンス ●ステークホルダーとの合意形成

(出典：「21世紀型スポーツ文化先進地京都の創造」などより著者作成)

は「ポピュリズム」のレベルじゃないか、スポーツは基本的人権の1つだとおさえ、訴えるぐらいの認識の高まりを期待していきたいということです。

企業に対しては、スポーツが自分の持ち物ではなく、公共物に対する支援という態度を持ってもらいたいということと、とは言ってもスポーツを自立させるためには、企業はスポーツを決して甘やかしてはいけない、という2点を主として提言しました。

メディアに対しては、活字、映像を問わず、スポーツはデパートのおもちゃ売り場の存在という認識で、販促や視聴率に繋がるので、この間のゴルフ中継でも議論になっていましたが、藍ちゃんブームということで順位が下がっても藍ちゃんばかり、一体優勝者は誰か、特番か中継かという問題や、お涙頂戴式の無理なドラマ仕立てなど、何も高尚なものだけが文化ということではないのですが、行き過ぎたエンターテインメント性と文化性のバランスを欠いた報道を何とか是正をとということです。ルールまでもがメディアによって変わっていることをもう一度考える必要があると思います。

行政に対しては、先程言ったように、日本には外国にあるようなレジャー・レクリエーション省やスポーツ・青少年省といったスポーツ行政を行う、総合的・横断的な組織がない現実から考えて、地域行政に要求するのは酷かもしれませんが、地方分権化を機会に、「知らしむべし、抛らしむべからず」式の「お上」の発想を抜け出すことを提言しました。体育館を作ってやった、さあやれではなく、どんな場所に、どんなスポーツのニーズがあり、予算の裏づけや支援するNPO組織は、といった具合に関係者のみならず、反対者も対象に合意の調達を考えていく発想をとということです

で、何よりも大事なポイントは、スポーツ組織体に関わるということで、そのガバナンスとして4点あげました。1点目は、スポーツマネジメントの方向¹⁶⁾です。古くはと言うか、それこそスポーツが「制度」に守られている時には、スポーツマネジメントというと、学校経営管理や運動部のあり方、運営方法とかと言って、施設や人の配置やプログラムなどを扱っていました。スポーツマネジメントの研究です。しかし、これまで説明したように、「制度」とい

うものが不安定になってきた今、求められるのは、スポーツに関する経営学的な研究です。正にこのSMSの講座です。スポーツ組織を経営体と捉え、その仕組みや意志決定メカニズムなどを対象としようということです。で、ここでも根拠として問題となるというか、おさえておかなければならないのが、用語の概念、定義といったものです。これへの相互理解が不安定なので、経営と管理、スポーツと体育という言葉が仲間割れ状態が発生するということです。

2点目は、スポーツは文化だとすれば、端的に言うとも、プロスポーツ集団も、大学の体育会もスポーツクラブもスポーツの公共性、社会における公共文化財であるということを考えると、勝敗を越えたヒューマンサービス組織としての認識が必要ということです。GDPによるサービス部門の比重がアメリカで70%、日本で60%となっている¹⁷⁾という事実があり、他とスポーツはどこで差異化を図るのか。それはヒューマンという視点を明確化することであり、医療・保健・福祉といった分野との関連性があるということです。そこには、ヒエラルキー型からネットワーク型を志向することも考慮しなければなりません。互いに上下ではなく、例えば選手やスタッフなどに権限と裁量を与え、自らに目標を設定させ、それに責任を持たせる。オーナーも同様に責任を持つ。こうして互いに自律的に問題解決に取り組むような組織体、つまり、エンパワーメントを高めるということが重要となります。具体的には、あいつはダメだとかあいつはまだ無知だからとかいった欠如モデルを作らないで、何度もコンセンサス会議を持つこと、互いにCSの手法を取り合うインターナルマーケティングを行う¹⁸⁾ことです。いわゆる素人の意見を聞くということです。身近な例で言えば、スポーツできる人ができない人に教えても自分ができるので、なかなかできない人に伝わらないことも多い。できない人に教えさせる、知らない人に聞く。そういう人ができるように理解してもらえるようになることを考えようということです。

こういう組織体にスポーツがなれば、短期間に実現しないかもしれませんが、スポーツへの投資がSRI（Social Responsible Investment：社会的責任投資）という、社会の視点で社会的責任を果たしているか、地域貢献をしているかな

どを評価軸とする投資判断¹⁹⁾、つまり、企業の無形資産と位置づける動向にマッチングする可能性もあるということです。

3点目は、悪循環を繰り返さないための指導者達の意識改革です。コーチは制度と個人の力関係が逆転する傾向にあることをまず認識する必要があります。言ってみれば、若い人たちが分からない、ジェネレーションギャップとよく言いますが、不確かで気まぐれで秩序のない自己決定をする予測不可能な青少年を、スポーツという特定の枠組みのメンバーとしてどのように迎え入れるかという逆転の発想です。スポーツは、複雑な人間関係にあると言われます。監督とコーチ、それらとOB組織、学生と監督・コーチといった間で表面的には出ないにしても水面下でリンクせず、そこにエネルギーを使ってしまって、何のためのスポーツか、誰のためのクラブかよく分からない状態が多く見受けられます。何とか理解しがたい他者を分かり合える仲間にできないかということです。

コーチという語源は、ハンガリーにある村の名前²⁰⁾だそうです。この村で始めて馬車が使われたことに由来することから、何かを馬車で運ぶということですから。あるところから目的の場所へ安全に早く楽に運ぶと解釈できます。そこから転じて、今ではコーチと言うと運動競技の指導者を指すわけですが。さらには、企業でも今よくコーチングと言います。目標達成に向け、相手の自発的な行動を促進させるコミュニケーション技術というところですが。しかし、よく考えてみますと、皆さん、このように思いませんか。全ての答えは実は本人が持っている、と。だから、基本は指示・命令で相手を動かすのではなく、ポイントはあくまで相手の自発的な行動を促すことにあります。コーチがこういうスタンスに立たないと、いつまでたってもスポーツからは主体的な人材の輩出が乏しいということになります。

関係性を如何に構築するか。それには、言わなくても分かっているだろうではなく、説明をするという姿勢がポイントとなります。私は日本式の「以心伝心」、「阿吽の呼吸」も考え方のパラダイムとして重要と考えていますが、言いたいことはそういうことも説明し、結果責任もとるということです。大学とい

うことで考えますと、我々という教育を提供する側の立場や考え方だけではなく、教育を受ける側の視点も入れるという、いわゆる顧客起点と成果起点の発想²¹⁾を持つということです。それには、一例として今までのようなマスマーケティングだけではなく、ワンツウワンで、アウトプレースメントで採用しているようなキャリアカウンセリング²²⁾をし、どんな人生を送ってきたかという自己理解と、これからどんな人生を送るのかという目標設定や意志決定と、やらなければいけないことといった具体的な行動の3つを明確にした上で、コーチがそれらを支援するといった方向が望まれます。その目標も、例えばプロであれば先に引退後の生活を考えさせることにより、これから始まる競技生活そのものが充実するように、人生設計と競技目標に分けて考えさせるといった方法に基づいたものです。そうしないと、今JリーグやIOCが実施しているセカンドキャリアに関するワーキンググループの立ち上げや、JOCのキャリアトランジションなどの取り組みに見られるスポーツ選手のセカンドキャリアの問題が深刻になってスポーツ界が先細りになります。「オリンピック終わればただの人」、「競技の夢は見られても生活の夢は見られない」では成熟した社会ではありません。

思うにスポーツ界はきついトラックの単線化にあります。簡単に言うと、スポーツできれば勉強している場合ではないだろうといった雰囲気があるということです。大学の4年間で人生を終えるのであれば問題はないのですが、現実問題として人生の勝負はそれからですよ。となれば、プロになるにしても、アマでやるにしても、支える側にまわるにしても、いずれにしても先程言ったような認知レベルをあげることが、今、一番スポーツに必要なことと思います。認知レベルが低ければ、セカンドキャリア獲得の時にコスト、お金と時間が多くかかる²³⁾という事実の確認が必要です。何も学問とは言っていないわけで、自分に与えられた情報を加工し、それを自分自身に即したより高い情報にする力を持つということです。こうすれば、肝心のスポーツ技術も必ず向上すると思います。インフォメーションという一般的で量的な情報を、戦略的な情報、インテリジェンスという質的な情報にしようということです。これには、多く

の選択肢，体験，時間をかけて練るといったことが必要です。だから関係者だけで群れてドグマに陥ってもこの力はつかない。学生であれば一人で授業に出て，多くの教師の考え方や人柄に触れることが自分のスポーツを考えることにもなるということです。それが私の言う文武両道です。問題解決のための情報ネットワークを自分自身で構築できる力ということです。こうしたスポーツ人が多くなれば，大学でも企業でも，どんな組織体においてもステークホルダーと対等に合意を調達し形成するための議論ができると思われれます。

〈お わ り に〉

では，時間も押してきましたので，最後にまとめさせていただきます。皆さんは，スポーツの周回遅れを取り戻し，スポーツが社会のリーダーシップをとれるように，7月まで，毎週知識を身につける努力をされるわけでありませう。で，その上でお願いしたいのは，決してセオリー遊びにならないようにということです。「知」には大きく分けて2つあります。数値化・定量化できるものとそれが難しいものの2つです。1つは知的価値です。これは市場価値になりやすい。逆にいえば金次第，といったところもあります。もう1つの情的価値は金には換算し難いのです。握力は何kgと計れますが，人間性や気合は何kgとは言えませんといったことです。そして，スポーツの価値は古いですが，「全人教育」の体現にあるわけですから。つまり，科学の知と実践の知の融合です。なかなかこれは難しいので，一般的にどちらかに振り子が振れるわけですから。パフォーマンスばかりを強調する人，ちょっと既存の専門分野を勉強してセオリーを机上で強調する人といった具合です。まあ，考えて見れば，世の中に絶対的なものというものはなく，補完し合う事実があるというスタンスを持つことがポイントになると思われれます。冒頭で説明した3つの円のバランスです。社会は今後，ますます否応なく「知識集約型」となります。だからこそ，スポーツが有する「暗黙知」的価値が必要となるわけですから。形式知を身につけ認知的レベルをあげた上，暗黙知的価値も定着させ，バランスのとれた社会を皆さんに作っていただきたいと切に思います。それには，スポーツを自己実現という人

間の欲求と位置づけ、組織や団体や政治で歪曲されたり、バイアスがかかったスポーツ条理ではなく、私たち個人が子供の時に感じた、運動に対する素朴で本能的な欲求やスポーツの楽しさを原点とした条理の構築が前提となると思われます。

長い時間ご清聴ありがとうございました。

本稿は、2005年4月より開催された、同志社大学大学院総合政策科学研究科スポーツマネジメントスクール（SMS）における基調講演を加筆したものである。

文 献

- 1) 村上陽一郎, やりなおし教養講座, NTT出版, P 163～180・P 216～229, (2004年)
- 2) 影山健他, みんなでトロパス! 敗者のないゲーム入門, 風媒社, P 19～27, (1984年)
- 3) 川口智久, 体育原理Ⅱ スポーツの概念, 不味堂出版, P 10, (1984年)
- 4) 小林寛道, 日本体力医学会スポーツ医学研修会テキスト スポーツ医学Ⅱ, 日本体力医学会, P 6-1～6-15, (1990年)
- 5) 水野忠文他, 体育史概説, 杏林書院, P 40～48, (1966年)
- 6) スポーツ大事典, 大修館書店, P 603～608, (1987年)
- 7) スポーツ白書, S S F 笹川スポーツ財団, P 72～73, (2001年)
- 8) 広田照幸, 教育, 岩波書店, P 16～19・P 25～35, (2004年)
- 9) 井関利明他, ソーシャル・マネジメントの時代, 第一法規, P i～iv, (2005年)
- 10) 松野 弘, 地域社会形成の思想と理論, ミネルヴァ書房, P 240～252, (2004年)
- 11) 井関利明他, 前掲書, P 54～55
- 12) 井関利明他, 前掲書, P ii～iii
- 13) 中竹竜二, ワセダクラブについての内容紹介, 第39回スポーツ政策フォーラ

- ム, (2003年)
- 14) 横山勝彦編, スポーツと京都のまちづくり, (叻大学コンソーシアム京都, P 2~197, (2004年)
 - 15) 横山勝彦編, 前掲書, P 235~245
 - 16) 前掲書 (スポーツ大事典), P 564~566
 - 17) 井関利明他, 前掲書, P 19
 - 18) 井関利明他, 前掲書, P 43
 - 19) 井関利明他, 前掲書, P 66~68
 - 20) 新英和中辞典, 研究社, (1985年)
 - 21) 金子郁容, 学校評価, 筑摩書房, P 35~37, (2005年)
 - 22) 肥田一信, アウトブレスメントをめぐる雇用政策 —— セーフティネット構築と雇用のミスマッチ解消に向けて ——, 同志社大学大学院法学研究科修士論文, (2005年)
 - 23) 横山勝彦他, スポーツ選手のセカンドキャリアに対する環境整備 —— Jリーグキャリアサポートセンターの試みを中心として, 同志社保健体育第43号, P 1~26, (2004年)

- ・田尾雅夫, ヒューマンサービスの組織, 法律文化社, (1995年)
- ・福島真人, 身体の構築学, ひつじ書房, (1995年)
- ・横山勝彦他, 入門 健康とスポーツの科学, 三和書房, (2003年)
- ・森 亘他, スポーツ, 東京大学出版会, (1986年)
- ・マイケル・ポランニー, 暗黙知の次元, 紀伊國屋書店, (1980年)
- ・同志社スポーツ政策フォーラム, スポーツの法と政策, ミネルヴァ書房, (2001年)
- ・体育原理専門分科会, スポーツの概念, 不昧堂, (1986年)
- ・ロジェ・カイヨワ, 遊びと人間, 講談社, (1990年)
- ・レイモン・トマ, スポーツの歴史, 白水社, (1993年)
- ・アンジェイ・ヴォール, 近代スポーツの社会史, ベースボールマガジン社, (1980年)
- ・湯浅泰雄, 気・修行・身体, 平河出版, (1986年)
- ・吉田孟史, 組織の変化と組織間関係, 白桃書房, (2004年)
- ・稲村 毅, 経営組織の論理と変革, ミネルヴァ書房, (2005年)
- ・関 春南, 戦後日本のスポーツ政策 —— その構造と展開, 大修館書店, (1997年)
- ・京都スポーツ文化研究会, 21世紀型スポーツ文化先進地京都の創造, (叻大学コンソーシアム京都, (2003年)